

佐伯の思ひ出(2)

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

酒と打上げ花火と徳利

小生福美兄と二人で昭和六年頃から昭和十五年まで朝日新聞の新聞配達をしていた。月に二回ほど四時起き佐伯駅に朝刊を積んだ一番汽車を待つ。二〇キロ程の束を四、五個？子供には重かった。リヤカーに積んで自転車をこぐ、常盤橋までは汗だくだ。常盤橋の坂を下る。楽しんで、ひといきいれて大手町の販売店まで全速力でまた自転車をこぐ。

寒二月？夜明け前大手町の高野酒屋の蔵人が道路に薙を敷き蒸した米を冷やしていた、酒造りも人も大変だな(この頃佐伯には酒の蔵元が数軒あった)。

中島？に河茂川という酒蔵があった。親父はこの酒

が大好きで小生よく一升ビンを持って買いに行った。大きな樽よりとくとくとくと黄金の水が朱塗りの一升樽へなみなみだ。平ための漏斗で一升ビンに吸い込まれる。よい薫りが辺りに漂う。坊や、おまけだと五、六滴、親父の笑顔が目につかぶ。

「バカ来い、バカ来い、金持って来い」と(親父は言っていた)。明治座の寄席太鼓の音が池船橋を渡って中村へ流れてくる。今日は太鼓の音がよく聞こえる。風向きが良いぞ」と急いで帰る。一升ビン置いて西空を見る。やがてボンボンと寄席の花火が二、三発中空高く打ち上げられ、パーンと割れて中に仕掛けられた落下傘がふらりふらりと揺れながらこつちに向かつて落ちてくる。それが目当てだ。

一発目は風が弱いのか途中で降下、二発目は馬場方面に、残りの一発は何処へやら。不思議に河茂川に酒を買いに行ったときと、寄席の花火の落下傘が重なった事が数回あった。今考えると親父の休日は明治座の開演に合わせ、お気に入りの浪花節を聞きこ機嫌で帰って銘酒河茂川の晩酌のパターンであったのであろう。

そんな河茂川が懐かしく数年前帰郷の時お伺いしまし

た。酒蔵はありませんでしたがご当主のご好意で河茂川名人の一升徳利と同じく名入りの盃を戴きました。誠に有難く親父の遺品として大切にしています(この一升徳利には記念との文字もあり、何かの記念に造らせたものである。いつ頃、何処で、いくらで、どのくらい焼いたのか、また栓は何であつたかお聞きしなかつたのが残念だが、財力だけではなく教養と云うか、道楽と云うか趣味と云ふか兎に角良い物を残してくれたと感心しています。酒の容器も一升ビン、一、八〇ビン、そして紙パックと變つて一升徳利の姿を見なくなつた現在、貴重な歴史資料品である)。

昔の城下町は殆んどが固定客だ、飲人も蔵人も良き友人であつたのだろう。独歩に明治の城下町の酒の風情記



銘酒 河茂川

の無いのが残念至極である。

吊し柿と樽柿(佐伯の味)

鮭は四年で生まれ故郷の川に帰るといふが、人間も他郷に出て年を取ると不思議と故郷の幼き時代の事を思い出すものである。

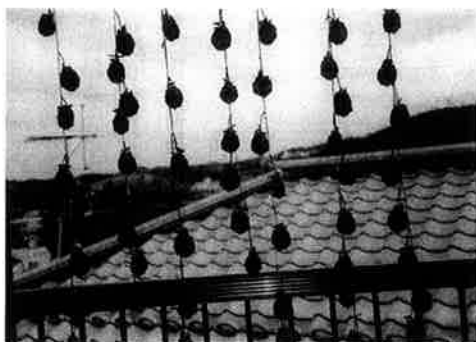
平成十二年十二月九日、佐伯市中村の宮崎チズ様よりダンボール一杯の渋柿が送られて来た(六七コ、丁寧にもヘタにTの小枝をつけてある)。早速干し柿作りに着手した。図解入りの説明書通りに皮をむく。ヘソの皮を少し残すのがコツだそうだ。五、六個むくと澁で包丁が黒くなり切れなくなる。その都度包丁を研ぐ。五五個むくのに一時間はかかつた。

一メートルほどのビニール紐にワッパを八個作り柿を吊す。七連物干し竿にかけて南の軒下に三日、北風が吹くと東の軒下に五日と天気の変化で吊し場を変え、朝夕揉んで二週間、立派な干し柿が出来た。一個試食した。天下一の絶品だ。正月に娘、孫等十数人集まるので自慢話と佐伯の味を味わせませすと宮崎チズ様に便りす。十二コは焼酎を吹いて梅酒の瓶に入れて樽柿をつくる。二十

日程で熟柿が出来た。

佐伯市中村の生家には渋柿が数本あったが手間がかかるのか、おふくろは干し柿をつくらなかった。この年齢になって初めて干し柿をつくる。しかも佐伯の渋柿で感無量なり。宮崎チズ様にT E L S します。チー姉もそんなに喜んでくれるとは感激ですと、この年齢になって古里の昔の味を味わえる幸なるかな。

尚、独歩が絶品だと賞した豊後の国佐伯の柿は『俺ん家の柿』だと木立の人が述べていた記憶があるので、独歩が食したのはこの樽柿ではなく木になつていた甘柿のことであろう。



吊し柿

白津峠

徳浦峠ともいう。白杵市大字大泊と津久見市大字徳浦の境にある峠。国道二一七号上にある。標高二八〇メートル。かつては一人がやっと通れる山道であったが、第二次大戦前軍用道路として改修され、トンネルが掘られた。昭和五十二年白津バイパス（白杵市大字福良と津久見市大字上青江間）が開通するまでは、津久見と白杵・大分を結ぶ唯一の道路だった。

峠付近は白津峠自然公園で、白杵湾の津久見島を眼下に、豊後水道や四国西部が一望できる。（『角川地名大辞典』）

明石峠

蒲江大字丸市尾浦・宮崎県東臼杵郡北浦町の峠。標高二四〇メートル。北方に場照山（ばてりやま）があり、明治十年（一八七七）の西南戦争の古戦場である。

古くからの明石峠（あけいし）は北浦村の塩見谷に下り、本口で佐伯市から来た石神峠（いしのかみ）の道と一緒に、洞、大井を通り梅木に下った。ところが最近、この峠の南に新明石峠ともいうべき道が生まれた。これが国道三八八号の新道である。（『角川日本地名大辞典』・『大分合同新聞』峠シリーズ（139））